

## 災害対策樹立に関する調査

(平成26年梅雨期からの大雨等による被害状況及びその対応について)

[議事録 2/2]

・災害の態様変化と分析・対応状況

### ○吉川沙織君

お手元に資料をお配りさせていただきました。今回は大きな洪水が起りましたが、実は被災地の方に行っておりまして、このような声を伺っておりまして。今回の台風被害において、被災された方々を中心に、今回のダムは国直轄の長安口ダムですが、国が長安口ダムの放流量を誤ったのではないかという声、それから、河川法に基づいて定められている操作規則に反した放流をしたのではないかという声が上がっています。実際に操作規則に反した放流を行ったのか否かだけで結構ですので、まず教えてください。



### ○政府参考人(池内幸司君)

今回の洪水におきましては、台風11号に備え、操作規則に基づいて的確に操作がなされたというふうに認識しております。

### ○吉川沙織君



的確に、操作の細則と規則はありますが、これに基づいて操作をされたということでした。

ただ、当該地域におきましては、表にありますとおり、近年におきましては数年に一度大きな洪水が発生しているような状況にあります。ですから、豪雨の前にダムで貯留する水量を事前に減らしておけば今回の甚大な被害は避けられたのではないかと声も上がっていますが、このような

対応ができなかったのはダムの構造上の問題なんですか。

### ○政府参考人(池内幸司君)



長安口ダムにおきましては、操作規則に基づきまして、予備放流水位以下に貯水位を下げ、洪水調節容量を確保するとともに、洪水調節を行っております。

多分委員の御指摘は、それ以上に下げるかどうかという御指摘だと思いますが、長安口ダムにつきましては、洪水調節に加えまして、かんがい、発電等、多目的ダムでございますので、これ以上下げるというのは技術的には困難でござ

います。

ただ、そういった条件も取っ払って、最大限下げたとした場合も検討してみました。その結果、やはりゲートの構造上、確保した流量に洪水の初期の流入量が貯留されてしまって、結果として洪水のピーク時における洪水調節効果はほとんど変わらなかった、そんな結果でございます。

### ○吉川沙織君

長安口ダムというのは、国交省所管の全国のダム 500 以上ありますが、全国で唯一、洪水調節容量と利水容量が全く同一の珍しい造りのダムとなっているようでございます。



実際今までも洪水がたくさん起こっていますから、事前の予備放流の在り方を柔軟にするために規則ではない細則を平成 21 年に変えておられますが、今般の災害を踏まえて一度、もうちょっと柔軟な運用ができるように細則だけでも見直すお考えはありませんか。あるかないかで結構です。

### ○政府参考人(池内幸司君)

過去の洪水を踏まえまして、最適な操作方法を検討してまいりたいというふうに考えております。

### ○吉川沙織君



実際、お手元の資料にありますとおり、今回は今までになかったような雨量、これは広島においても、それ以外の被災地においてもそうでございますが、今までに考えられなかった雨量があつて、だからこそ今回の災害というものは、気候と、それから、もしかしたら、これは山間地域です。

今回の土砂災害についても急斜面地を始めとする山間部です。山の保水力というもの、それから、間伐をちゃんとこななかった我々の側にも問題があるのではないかと、この気象条件と山の問題があるのではないかと、この二つの側面もあるのではないかと考えますが、内閣府、いかがでしょう。

#### ○政府参考人(日原洋文君)



まず、気象状況の変化についてでございます。

直感的には何となく、観測史上 1 位というような雨が最近多く降りますし、あるいは特別警報の基準となりました 50 年に一度の大雨というものもよく起きますので、多くなっているというような印象を持っておりますが、どうも統計的になかなかそれを明確に言えるような状況にはないようでございます。

ただ、統計的にはっきりしておりますのは、時間雨量 50 ミリとか時間雨量 100 ミリという短時間に集中的に降る雨の起きる箇所数が大幅に増えているということは言える、これははっきり言える。最近、昭和 50 年代から比べますと、この 30 年の間に、大体 50 ミリ以上の雨が年間にどれぐらい発生するかというのが、1,000 地点当たり、50 年代には 175 回だったものが、平成 14 年以降この 10 年間では 230 回、100 ミリ以上というのは、かつては 2.2 回だったものが 3.3 回ということで、大体 1.5 倍に増えているという状況でございます。

一方で、保水状況につきましてでございますけれども、何というんでしょうか、なかなか難しいのは、本来広葉樹林があった状態と比較するというよりは、杉の木が小さいときから育ってきた状況で保水力がどれだけ変化したのかということなかなかちょっと説明しづらいですけれども、一般的に、森林の保水力につきましては一定規模以上の大雨になるとそこで飽和してしまうというふうに言われていますので、最近の洪水につきましてはやはり雨が大きいという方が影響は大きいのかなというふうに判断しております。

#### ○吉川沙織君

今、両方の側面それぞれ触れていただきましたけれども、森林の有する多面的機能の中には土砂災害防止機能、これ日本学術会議の答申でも触れられていますので、いろんな側面から国民の生命、財産、身体を守るための取組をしていただければと思います。

ありがとうございました。

